

# 保育現場において抱かれる保育者の「表現」観念

—『女子体育』誌における  
「保育園・幼稚園の表現」から—

佐々木昌代

## 1. ねらい及び方法

(社)日本女子体育連盟発行『女子体育』より、実践報告「保育園・幼稚園の表現」(平成元年4月号～平成6年3月号)、同「内容と指導」(平成6年4月号～平成8年3月号)を取り上げ、具体的な指導案を除く文章部分を意味微分・類別し、以下の(1)～(4)について、保育園・幼稚園の保育現場において抱かれる保育者の表現観念を探究する。

さらに、前回発表した小学校体育低学年の指導過程における指導者の創作ダンス観念と比較考察する。

- (1) 保育者の表現に対する意識・考えについて
- (2) 保育者が考える幼児の表現の実態について
- (3) 保育者が意図する表現のねらいについて
- (4) 保育者の表現実践後の課題意識について

年度	平1	平2	平3	平4	平5	平6	平7	計
保育園	1	3		2				6
幼稚園	5	4	5	6	2	3	1	26
計	6	7	5	8	2	3	1	32

## 2. 結果と考察

### (1) 保育者の意識・考え

- ・生活全般、遊びのすべてが表現であり、表現は遊びを広め、深めるとともに生活を豊かにし、子どもの成長を促す。また、子どもが遊びをつくり出し、遊び込むほどに表現の内容が豊かになる。
- ・すなわち、生活・遊びと表現は相互作用的、循環的な関係にあり、子どもの表現を「のびのびとした」「楽しい」ものとするのは、子どもの心を動かし、揺すぶる環境を保障すること、「子ども自身の内面の育ちを子ども自身が感じ取って」表現する姿を見逃さないことである。
- ・子どもたち一人ひとりの個性やイメージを大切にしようとするとき、理屈で説明しても理解できない子どもたちを行事や新たな遊びなどに向かわせたいとき、表現をとおして「なりきる」ことで「自然に」流れをつくることができる。

### (2) 幼児の表現の実態

- ・自分達で考えつくり出さなくても遊べる環境

にある子どもたちも、機会に恵まれると豊かな表現力を発揮する。表現は子どもたちの自由な発想や考えを引き出し伸ばすことのできる格好の場である。

- ・遊びをさらにおもしろくしたい、発展させたいとの思いや願いが強すぎると、子どもたちを枠にはめ、特に身体表現では、思いや願いとは違った表現が出てくる。
- ・「さあ、〇〇の表現をしよう」といった課題によるのではなく、子どもたちは自分の思いを伝えようとして「思わず」身体が動いて表現する。従って、感じたことや見たことなどを素直に表現しようとする子どもたちの思いに「ひたすら」寄り添い、タイミングよく援助する。

### (3) 表現のねらい

- ・子どもたちが本来持っている表現意欲を引き出し、自分の身体で表現する楽しさをあらためて知らせたい。
- ・一つの活動はそれだけで完結することなく、すべて繋がっている。表現活動も余韻を生かし、子どもたちの次の自発的な遊びに発展させたい。
- ・一つの目標を達成した充実感を他の活動に取り組み力としたい。特に、生活発表会や運動会などをとおして、好きなことを好きなだけするばかりでなく、一つの目標に皆で頑張ることも大切にしたい。

### (4) 保育者の課題意識

- ・身体表現の機会を持つように努めるが、あくまで、子どもたちの生活の流れの中で子どもたちの発見を生かし、広め、深め、次の発見に繋げ、遊びがさらに豊かになるような方法を心掛ける。
- ・そのために、子どもの表現とともに、背景にある子どもの生活環境・体験を大人の枠にはめず、子どもの目の高さで整えていく柔軟性を持ち、常に子どもたちとともに新鮮な気持ちで取り組む。

## 3. まとめ

幼児の表現は、小学校低学年の表現学習の生活体験に根ざす、子どもたちの思いを大切に、子どもたちの生活そのものを活気づけるといった点において、等しいもののようにもみなされる。

しかし、幼児の生きる姿が表現であり、表現が幼児の育ちであるとして、課題によって引き出すのではなく、生活の流れの中で子どもたちの思いに寄り添って一人ひとりの表現を見逃さないという徹底した子ども主体の姿勢に、まさに保育者の主体性があるのではないかと考える。